

## 解説

工藤雄一郎<sup>1</sup>: 下宅部遺跡から出土したウルシの杭とその年代  
 Yuichiro Kudo<sup>1</sup>: Wooden stakes of *Toxicodendron vernicifluum*  
 excavated at the Shimo-yakebe site and their radiocarbon dating

下宅部遺跡ではこれまで漆塗りの杓子や堅櫛などの木製品、漆塗り土器、漆液容器など、縄文時代の漆利用に関連する遺物が多数出土している。また、縄文時代後期と考えられる河道1の流路1から、1000本の杭が列状に検出されているが(KA1-5杭列)(図1)、500点中70点の杭は樹種同定によってウルシ(*Toxicodendron vernicifluum* (Stokes) F. A. Barkl.)と同定され(能城・佐々木, 2006), うち43点には漆液の採取に関連すると思われる線状の痕跡(図2)が1~3本ずつ見ついている(千葉, 2006)。これらの資料は、当時の下宅部遺跡周辺にウルシが生育しており、ウルシの樹液を採取したあと伐採し、杭としてウルシの樹木を利用したことを示しており、縄文時代におけるウルシ利用の様子がうかがえる重要な資料である。筆者らは、線状の痕跡のある8点のウルシの杭について放射性炭素年代測定を実施した(工藤・国立歴史民俗博物館年代測定研究グループ, 2006)。その結果、年代値は3725~3375 <sup>14</sup>C BPの間で大きくふたつのグループに分かれた。おおよそ、古い一群は縄文時代後期前葉の堀之内1~2式期に位置づけられ、新しい一群は縄文時代後期中葉の加曽利B1~B2式期に位置づけられることが明らかとなった。丘陵側に近い列の杭が新しい傾向があるが、年代測定を実施した杭の本数が少ないこともあり、杭の位置関係と年代測定結果の新旧関係には明確な整合性が見られない。このため、これらの杭列が堀之内式期から加曽利B式期の間、恒常的に維持・管理されてきたのか、あるいは途中で断絶があり、複数の時期に作られた杭列が重複しているのかは明らかになっていない。ウルシ利用や低地利用との関係を含めた、年代学的な検討が必要である。

## 引用文献

千葉敏朗, 2006. 下宅部遺跡出土資料からみた縄文時代の漆利用. 「下宅部遺跡I(1)」(下宅部遺跡調査団編), 367-379. 東村山市遺跡調査会, 東村山.

工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館年代測定研究グループ, 2006. 下宅部遺跡から出土したウルシの杭の<sup>14</sup>C年代測定. 「下宅部遺跡I(1)」(下宅部遺跡調査団編), 363-366. 東村山市遺跡調査会, 東村山.

能城修一・佐々木由香, 2006. 下宅部遺跡からのウルシ木材の出土. 「下宅部遺跡I(1)」(下宅部遺跡調査団編), 358-359. 東村山市遺跡調査会, 東村山.

(<sup>1</sup> 〒464-8602 愛知県名古屋千種区不老町 名古屋大学年代測定総合研究センター)

(2007年5月9日受理)

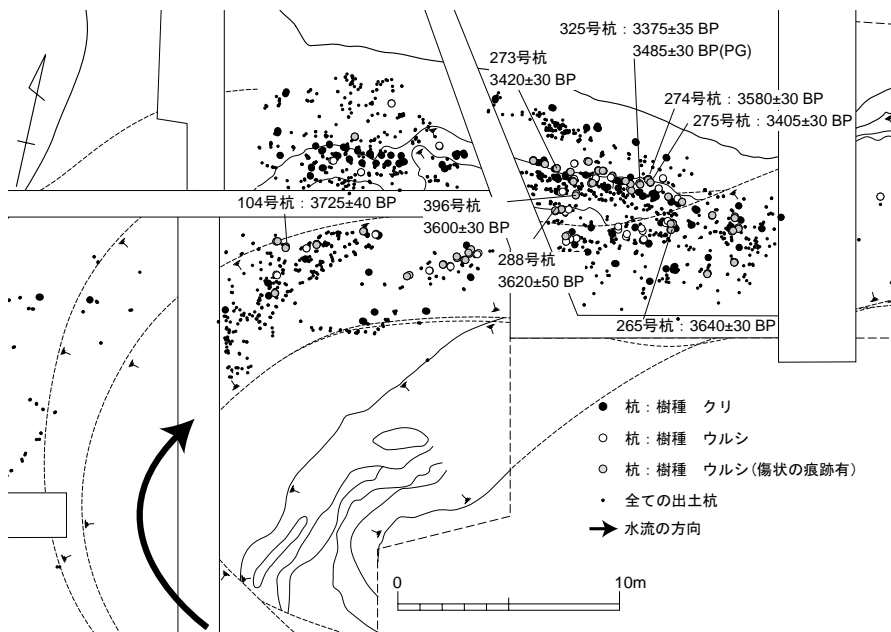


図1 下宅部遺跡のKA1-5杭列およびクリ・ウルシの杭の出土位置。325号杭は乾燥防止用に塗布したPG(プロピレン・グリコール)の除去に関する実験を行っているため、新しい方の年代が、325号杭の年代を示していると考えられる。

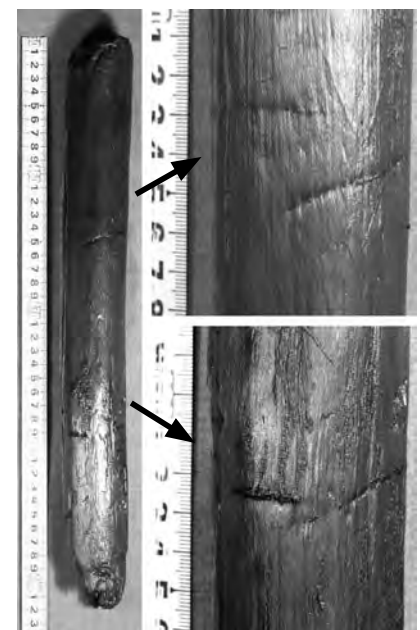


図2 274号杭およびウルシ樹液採取に関連する2本の痕跡。3580±30 <sup>14</sup>C BPという測定結果が得られている。